診療室

1頭の牛が教えてくれた多くのこと

重本志乃†（山口県西部家畜診療所大津支所係長・山口県獣医師会）

本州の西端で産業動物臨床に従事している．この地域の畜産は家族経営，兼業，個体診療中心である．周囲を日本海と里山に囲まれ，平地が少なく棚田が広がり，小さな田畑の1枚1枚が丁寧に利用されている．手押しの1輪車よりも大きな道具が入らない昔ながらの小さい牛舎や，トラクターが入れない狭い田畑も珍しくない．この地で代々農業を営んできた先人達の苦労が偲ばれる．母校の酪農学園大学（132ha）には平らで広い地面がふんだんにあったが，今の私には四畳半サイズの平地も十分に広く思える．その様な日々のなかで牛の骨折に遭遇，そこから温かく人の縁がつながる経験をした．

骨折したのは体重400kgの黒毛和種の育成牛．上腕骨の皮下骨折で起立困難．これは搬出の手続きをしよう．小さな牛舎の貴重な1部屋を起立困難の牛が占領していては，他の牛に迷惑がかかる．しかもちょうど田植えの季節で農繁期．この忙しい時期に患牛の看護が重なったら，畜主さんが牛の看護倒れになるかもしれない．この状況では患牛と速やかにお別れするのが最適だ．と思うのだが，畜主さんにも私にも心残りがあった．優良な系統の後継牛で，初回授精をしたばかり．つまり，大きく期待されている牛なのにまだ一回も活躍していない．惜しい．例えば，渡米したダルビッシュ投手が初登板の前に引退するとか，そのくらいに惜しい．そこで山口大学獣医外科学研究室の田浦教授に相談したところ，患牛を引き受けることが可能との返事をいただいた．とはいえ治癒の可能性は低いのが前提なので，畜主夫妻は「治る可能性が低いのなら，治療せずに処分する方が牛にとって良いのではないか．注射や手術のストレスを与えるよりも」，「結果的に治らなくてもいいから，僅かでも可能性があるなら治療してもらおう．今あきらめるよりも」と（実際は方言でもっと率直な表現で）迷っていたが，最終的には治療の方向を選択して牛を大学へ預けた．

大学で骨折の治療を受けた牛は術後の継続治療のため引き続き大学に留まり，学生さんの1人が，日常の飼育管理や看護の担当に就いた．この学生さん（以下，Iさん）は学士編入で獣医学部生になったが，経歴にはサファリ勤務などの多様な経験があり，サファリではキリンやバッファロー，シマウマなど草食類全般とダチョウやワシなど鳥類を担当したそうだ．「もともと大動物が好きだったことと，牛のケアを経験したことがなかったので，牛が入院すると聞いて希望して担当に就いた」というIさん．初めての牛のケアは普段経験する小動物の扱いとは全く異なり，戸惑うことも多かったそうだが，田浦先生や畜主さんの指導と励ましのもとで管理に取り組んだ．牛が温厚な性格だったことも幸いし「牛がなついてくれて毎日のコミュニケーションを通して楽しく過ごすことができました」とのこと．私はたびたび大学へ牛を見に行ったが丁寧に管理されており，畜主夫妻も「牛の待遇が我が家よりも遥かに良い」との感想だった．山口大学には牛専用の入院施設がなく，牛の待遇の良さにはIさんの尽力が大きかった．

牛は術後二カ月近く大学で継続治療され，その間に田浦先生，Iさん，畜主夫妻，それに私も，治療の方向や予後についてそれぞれの立場で考え話し合った．Iさんが加わったことにより，牛＝経済動物という基本に沿いながらも，通常の診療での畜主さんと担当獣医師の会話とはかなり異なる話し合いになった．ここでIさんにはかなり葛藤があった．牛が治療で辛い思いをしているのではないかという思いと，できうる限りの治療を行うことがこの牛のためではないかとの思い．また小動物とは全く異なる畜主さんの考えや，経済的観点からの治療のあり方も，Iさんに多くのことを考えさせた．この状況においては畜主さんの懐の深さが大いに発揮されて，

重本志乃

—略　歴—

1996年　酪農学園大学酪農学部獣医学科卒業
同　年　青年海外協力隊ネパール派遣
1998年　山口県農業共済組合連合会勤務
2010年　山口県西部家畜診療所勤務
現在に至る

† 連絡責任者：重本志乃（山口県西部家畜診療所大津支所）
〒759-4401　長門市日置上1541-1　☎0837-37-3022　FAX 0837-37-4311　E-mail : ootsu@ymgc-nosai.or.jp

Iさんの心情に十分な配慮がなされた．

最終的に牛は大学で死亡し，死亡牛処理の手続き上，牛は一旦畜主さんの元へ戻ることになった．牛と田浦先生と意気消沈しているIさんとが大学のトラックで畜主さんの元へ到着．畜主の奥さんは自分の牛が死んでしまって大変なのに，そんな素振りはなくIさんを励ます．「牛を飼っちょると，悲しい経験は必ずあるよ．飼い主も獣医さんも皆，乗り越えとるんよ」．奥さんがIさんへ向けた言葉は，私の心にも沁みてくる．そして皆で牛を引っ張って畜主さんのトラックに移す．さらに大学のトラックがパンクしていたので，その場でタイヤ交換をする．牛との別れを悼むIさんの横で，畜主さんによる手際良いタイヤ交換が進行．それで死亡牛の帰宅は，後半には「タイヤ交換が済んで良かった．帰路お気を付けて」という前向きな雰囲気になって終了した．

この症例の結果は，費用対効果や生産性向上という産業動物獣医療の基本とは全く相反するものとなった．けれど畜主さん曰く「治療してもらって後悔はないし，費用についても構わない．この件で田浦先生やIさんとの良い出会いがあった．あの牛が多くの人の縁をつないでくれた」と．この牛は治療や管理に関する多くの知識や経験をIさんに教え，良き先生役を果たし，畜主さんとの縁をIさんに繋げた．Iさんの経験は，この牛以降に大学へ搬入された患畜（牛）のケアに活かされている．また私にとっては，今回Iさんと共に患牛について考えたことが，改めて自分の仕事を見直す機会となった．そして診療所と大学との連携が，家畜頭数が多くはない山口県においても学生が産業動物に目を向ける一助になれば，とも思う．

今回この症例に遭遇したこと，田浦先生やIさんをはじめとする大学の方々，畜主さん夫妻，そして当初より助言や相談と共に経過を任せてくれた職場の皆様に感謝したい．